

|b



図 1.
有効軸長 8mm の穿孔用ピアスを
装着したピアスガン (a) とボディ
ピアス用のピアッシャー (b)

表 1.
ピアッシング後 3 か月以内
に発生したピアス皮膚炎

ピアッシャー	あけた孔の数	ピアス皮膚炎を 起こした孔の数	発生率
K18ピアス (非医療用具)	2952	741	25.1%
製品 A (軸径 0.7 mm・有効軸長 6.0 mm)	2675	389	14.5%
製品 B (軸径 0.8 mm・有効軸長 6.0 mm)	129	13	10.0%
製品 C (軸径 1.2 mm・有効軸長 6.0 mm)	14358	1053	7.3%
製品 D (軸径 1.2 mm・有効軸長 8.0 mm)	79	2	2.5%

穿孔用ピアスの長さとおき

短く細いピアスを用いれば孔内に浸出液が貯留しやすく、またピアス頭と留め具が皮膚表面に常に接触した状態であるので、汗などで濡れて不潔になり感染しやすくなる。太く長いピアスを用いると浸出液は孔外に排泄されやすくなる。

ピアス頭から留め具までの耳垂を貫く部分の長さを有効軸長というが、穿孔用ピアスの有効軸長は 6 mm のものが欧米では標準的である。これは耳垂が薄い幼少時にピアッシングを終える欧米の社会習慣によるものであって、低年齢化したとはいえない大人の体格になってピアッシングする我国では短すぎる。

ピアッシング目的の来院者の耳垂厚を連続して測定したところ²⁾、6 mm 未満であったのは 23.1%、7 mm 未満であったものは 49.7%であった。ピアス周辺の皮膚の弛緩を行うためにはピアス頭や留め具と皮膚の間に若干の隙間を要するから有効軸長は 8 mm 程度必要である。耳垂厚が 8 mm 以上あったものも 12%あって稀ではない。そ

のような例では後述するボディピアッシャーの適応となる。

穿孔用ピアスの素材と金属アレルギー

耳垂の前後から孔に向かって上皮化が進行し、孔内が完全に皮膚で被覆され安定するには 4〜6 週間を要する。その間は金属と身体組織が皮膚を介さずに直接接触しているのでピアスの素材金属に容易に感作される危険があり、図 2 で示したごくピアス未経験者と経験者では金属アレルギーの罹患率は約 2 倍の開き³⁾がある。最近では純チタンで表面処理されたものや樹脂製のものも普及している。

ボディピアス

耳垂以外の部位につける太いピアスはボディピアスと呼ばれる。また耳垂であっても太いピアスの場合もそのように呼ばれることが多い。通常の耳垂へのピアッシングではさすがに安全ピンや樹脂は臉をひそめてきたが、ボディピアスではニードル法がもっぱら用いられている。すでに述べた